

中国の生薬“毛麝香”について

久内清孝, 菅谷愛子

東邦大学薬学部¹⁾

An Identification of Chinese Folk Drug “Mo-tim-hum”

KIYOTAKA HISAUCHI and AIKO SUGAYA

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Toho University

(Received August 6, 1971)

The anonymous chinese crude drug used in Formosa as a folk remedy of poliomyelites was studied.

The Original plant of this drug was identified to be *Adenosma glutinosum* (L.) DRUCE belonging to Scrophulariaceae after comparative study with herbarium specimens. The etymology of vernacular nomenclature is also discussed.

最近、台湾で小児麻痺の後遺症に効くといわれる民間薬で、メボウキ *Ocimum basilicum* L. によく似た特異の芳香を発散する生薬について、生薬名、原植物名が不明であったので、形態学的に検討した結果、ゴマノハグサ科の一年生草本である *Adenosma glutinosum* (L.) DRUCE に該当し、広東地方の方言で毛麝香“Mo-tim-hum”と呼ばれるものであることを確認し得たので記録する。

実験の部

台湾市場の生薬および比較のため *Adenosma glutinosum* (L.) DRUCE の標準標本として、東大資料館理学部の腊葉標本 (① 海南島, T. Yamazaki, 1916, ② Tonkin, B. Hayata, 1916, ③ Hongkong, M. Togashi et G. Murata, 1964, ④ Kwangtung, M. Togashi et G. Murata, 1964) を用いた。

生薬の形態は、地上部を 3—5 cm にカットし、主として茎と葉からなるが、まれに熟した果実をみとめる (Fig. 1 A, D)。

葉は対生し、やや鋭先頭の皮針形、長さ 3—6 cm, 巾 2—3 cm, 1.5 cm 前後の長い葉柄を持つ (Fig. 1 B) 暗褐色で上面がやや濃く、葉脈は裏側に隆起して、上面、下面共に多細胞毛を密生し、下面には大きい腺毛 (径約 80—100 μ) が多数散在する。内部構造は、葉脈部は下面に大きく隆起し、その隆起部では、非常に凹凸のはげしい表面構造および数層の厚膜細胞がみられる (Fig. 2 A₂, D)。上面表皮細胞は、やや厚膜の乳頭状の細胞からなり、表面に長短 2 種類の多細胞毛 (短毛: 2—4 細胞, 長さ 200—650 μ , 長毛: 6—8 細胞, 1300—1600 μ) が多数存在する (Fig. 2E)。葉の厚さは 80 μ 前後で、一層のやや長いさく状細胞が葉肉のほぼ半分を占め、海綿状細胞が 2—3 層みられる (Fig. 2A)。さく状細胞中には直径約 4—5 μ の集晶がみとめられる。

茎は丸く、径 1.5—4 mm で中空である (Fig. 2C)。外面は灰褐色—黒褐色、表面全体に長い多細胞毛を密生する。表皮細胞は膜が厚く、葉と同様 3—7 個の細胞からなる多細胞毛 (長さ 300—1000 μ) を有する。表皮の内側には 2—3 層の厚角細胞があり、節部には非常に膜の厚い繊維束が存在する。不明瞭な形成層を境にして、木部には大きな道管 (径 35—52 μ) が単独あるいは 2 個連続して存在し、1 列の放射組織も膜が全体に肥厚している。皮部柔細胞および髄中に径約 2 μ の澱粉粒が少量みとめられるが、結晶は茎全体にわたってみとめることができなかった (Fig. 2B)。

果実は、小枝に 1 個または数個着いた状態で、まれに混在するが、完全な形態を保持しているものはほとんどみと

1) Location; 542 Miyama-cho Funabashi, Chiba.

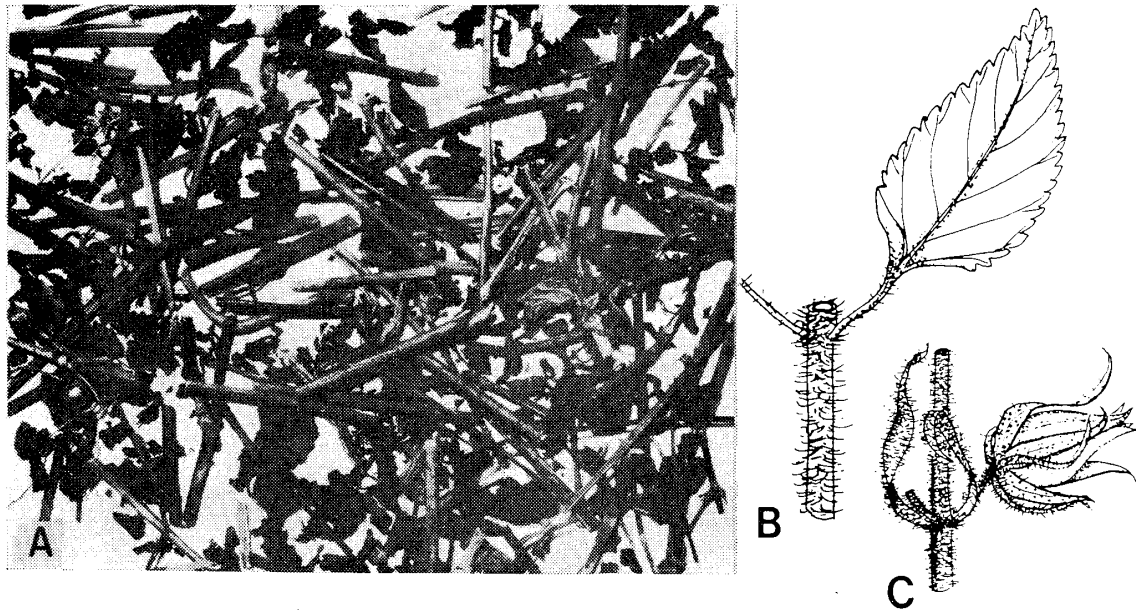


Fig. 1. A: Crude drug "Mo-tim-hûm" B, D: Leaves C: Fruits E: Herbarium specimen of *Adenosma glutinosum* (L.) DRUCE

められない。長さ約 8 mm で、多細胞毛の密生する 2 枚の包葉と 5 枚のがく片をつけ、がく片には葉と同様に腺毛が散在する。2 心皮 2 室で先端は 4 片にわかれる (Fig. 1C).

考 察

以上の観察結果のように、特有の芳香をもった対生葉と丸い中空の茎、および植物全体に毛が非常に多く、特に葉には大小 2 種類の密生する多細胞毛の間に、大きい腺毛が数多く散在し、内部構造的には葉脈部分の凹凸のはげしい厚膜細胞と、結晶、澱粉などの内容物が非常に少ないことが、特徴と考えられる。これらの点が、すべて標準標本と一

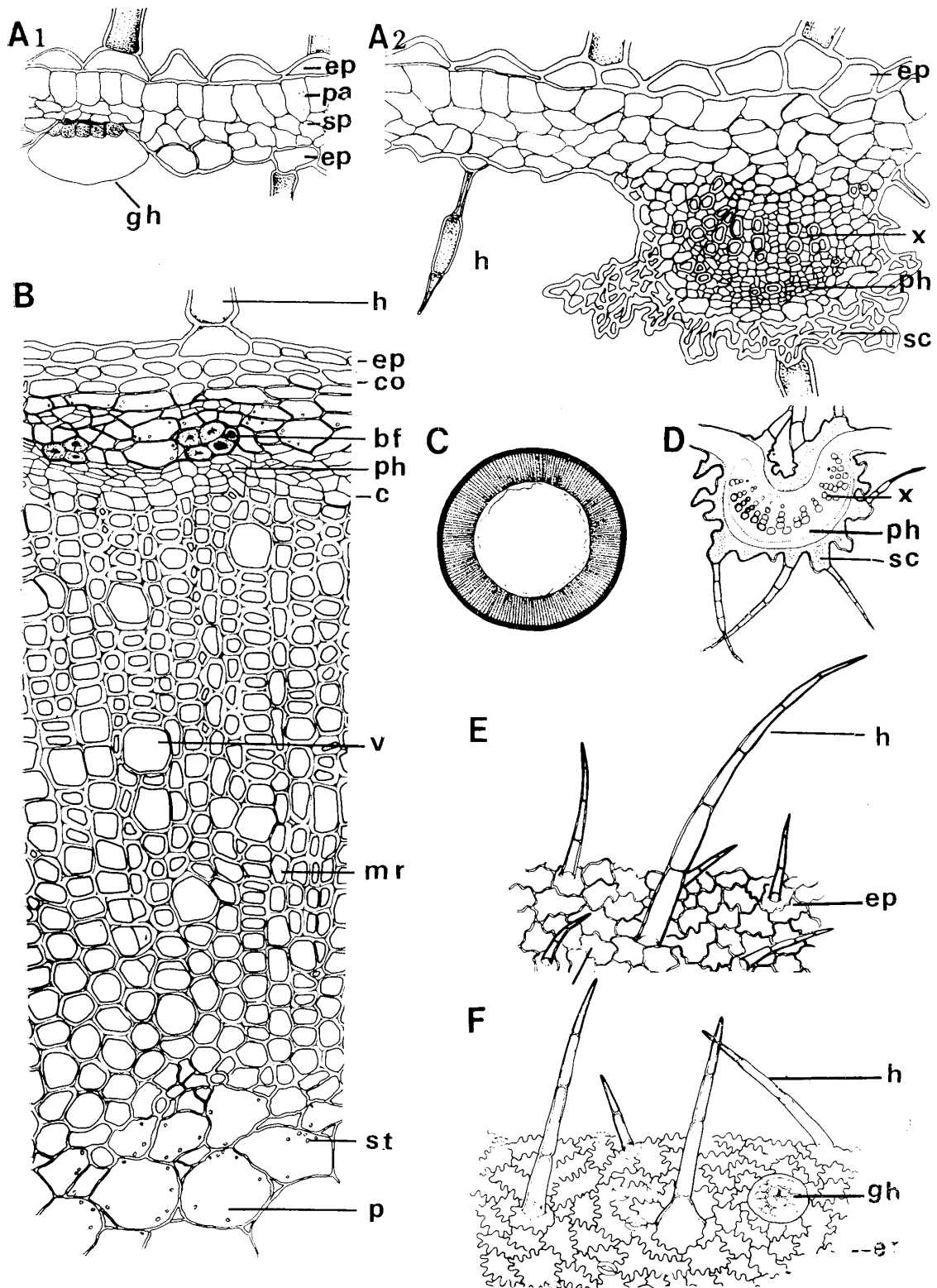


Fig. 2. A₁: Transverse section of the leaf
 A₂: Transverse section of vein part of the leaf
 B, C: Transverse section of the stem
 D: Costa of central part of the leaf
 E: Hair of upper surface
 F: Hair of lower surface

致し、本生薬は *Adenosma glutinosum* (L.) DRUCE に該当することを確認し得た。しかし、雑草の民間薬であったために、北方にくわしく、南方に疎な本草の古書には収録されていない。この属の分布は、ジャワ、インド、マレー、濠州から中国の南部にわたり、この地域では普通の雑草らしい。I. H. Burkill²⁾ は、2種の同属植物 *A. capitatus* BENTH. と *A. caeruleum* R. Br. とをあげ、いずれも中国人薬店で市販されていると記述してある。このことから判断すると、この類は、この地方では相当広く利用されていて、その風習が現在台湾にもおよんだもようである。

学名は上記の通りであるが、すでにリンネの時代から学界に知られていたもので、その変遷をたどってみると次のようになる。

Adenosma glutinosum DRUCE G. C. in Supplement to Botanical Exchange Club Report for 1913, Part 1. Notes on nomenclature Bot, Exchange Club Brit. Isles Rep. 3 : 413 (1914)

Syn. *Gerardia glutinosa* L. in Species Plantarum p. 611 (1753)

Adenosma grandiflorum BENTH. ex HANCE in Jour. Lin. Soc. XIII (1874)

漢名ももちろんなく、種子植物名称³⁾には広東地方の方言として、毛麝香を属の中国名として採用している。また、広州植物誌⁴⁾には、この方言名を *A. glutinosum* (L.) DRUCE の種名に適用しているので、これを正式の名として使用してよいと考える。なお、同書によれば、「葉揉之發出香氣麝香，且全植物體被毛，故有毛麝香之稱，葉入藥，有袪風消毒之功，且為一種引藥，聞可代替麝香，廣州熱藥店有出售。主治風濕瘡瘍。」と記述されていることから判断して、彼地では民間薬として利用されているようである。なお、成分については、同属植物の *A. capitatus* BENTH. (前出) 地上部の精油⁵⁾の報告がみられるだけで、本品についての報告はみあたらない。

List of abbreviation

bf; bast fiber, c; cambium, co; collenchyma, ep; epidermis, gh; grandular hair, h; hair, mr; medullary ray, p; pith, pa; palisade parenchyma, ph; phloem, sc; sclerenchyma, sp; spongy parenchyma, st; starch grain, x; xylem

2) I. H. Burkill, "A dictionary of the economic products of the Malay peninsula", Government of the Straites Settlements & federated Malay States Published by the Crown Agents for the Colonies Vol. 1, 49 (1935).

3) 中国科学院編，種子植物名称，科学出版社（中国），10（1954）。

4) 中国科学院华南植物研究所編，広州植物誌，科学出版社（中国），593—594（1956）。

5) P. V. Nair, K. S. Madhavan and N. S. Varier, Bull. Central Research Inst. Trivandrum, India, 79—86 (1959).